

III.3.7 道産マイタケ新品種の高品質化を目指した栽培技術の開発

平成17～19年度
生産技術科，森主任林業専門技術員

はじめに

本研究は，平成14～16年度実施の「針葉樹おが粉の利用に適した道産品種の育成」を引き継ぎ，選抜したマイタケ新品種の生産性や品質を向上させる栽培技術を確立するとともに，消費者からの信頼性を高めるために材料の安全性を検証するなど，新品種の高品質化を図ることを目的とした。平成17年度は，新品種を品種登録するために必要な栽培特性等各種基礎データを収集した。

研究内容

種苗登録分類調査に基づき，以下の検討を行った。

1. 新品種の遺伝的および生理的特性の検討

寒天培地上における他品種との区別性や温度特性を把握した。

ここでは，比較用の対照品種(市販品種:M51号，M52号)と対峙^{たいじ}培養した結果，対照品種と明確な帯線を形成することを確認した。また，寒天培地上における温度特性を検証し，対照品種は最適生長温度が26～28℃であるのに対して新品種は24℃であることを明らかにした。以上の結果から，新品種の区別性を明確に示した。

2. 新品種の自然栽培における温度特性の把握

対照品種も含めて屋外に菌床を埋設(16年5月，17年4月)し，子実体の発生時期や形態について比較・検討した。

平均発生日，平均発生温度については，対照品種のうちM51号は9月25日±7.6日，13.7℃，M52号は10月2日±4.6日，12.2℃であった。新品種は9月30日±4.2日，12.8℃であり，M52号と同様に中生～晩生の中間の特性であることが明らかとなった。また，露地発生の子実体(第1図)の形態等について比較評価(第2図)した結果，新品種の傘径と厚さは，それぞれ30.5mm，2.45mmであり，いずれも新品種>M52号>M51号の傾向となった。

3. 新品種の空調栽培における栽培特性の把握

コーンブランを栄養材として最適生長温度および



第1図 露地発生の子実体



第2図 子実体の形態評価

最適発生温度を測定した。最適生長温度はいずれの菌株も18℃であったが，最適発生温度は市販品種が18～22℃であるのに対し，新品種は14～18℃であった。寒天培地上における温度特性の結果とあわせて，空調施設において新品種は比較的低温域での栽培管理によるエネルギーコストの低減が可能であることがわかった。培地材料に対する特異性としてはM52号と同様にコーンブランに比べフスマの収量が高く，生産効率が約1.8倍となった。

まとめ

17年度は上記の結果をとりまとめ，新品種の名称を「大雪華の舞1号」として品種登録の手続きを開始した。18年度は新品種の品質向上が期待できる栽培条件の検討や培地材料の安全性の検証等を行う予定である。